

Eltoria Trilogy Side A&K

宮永 悠也

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

地球での事件…、それからエルトリアへと再び戻って来たアミタ達のその後のお話。

惑星再生を目指す彼女達の、それぞれの話をトリロジー化、三部に渡り彼女達の葛藤や未来を描きます。

【注意！】この作品には魔法少女リリカルなのはReflection・Detonationのネタバレを含んでいます！

十分にご注意下さい！視聴済みの方ならばより一層楽しめるかと思えます♪

目次

| | | |
|----|-----------------|----|
| 00 | プロローグ | 1 |
| 01 | 回復の兆し | 4 |
| 02 | 故郷 | 9 |
| 03 | 傷痕 | 23 |
| 04 | 後悔と、あの日の繋がりと…。 | 28 |
| 05 | 変われない痛み、拭えないあの日 | 34 |
| 06 | 溢れた想いの先に…。 | 46 |

00 プロローグ

私達が住んでいるこの星の名前は、惑星エルトリア。

現在は荒廃し、人が住める場所は数ヶ所しかないほど、この星の生態は死滅しかかっている。

【死蝕】と呼ばれる病が星を覆い、生物同士の共喰いや、異常気象、地殻変動などを繰り返しながら、星の命は荒廃の一途を辿っていた…。

でも、私のパパ、グランツ・フローリアン博士は、そんなエルトリアを元の綺麗で美しい星にしようと、研究を重ね星の緑化に勤しんだ。

小さかった私やお姉ちゃんのアミタも、パパの研究でエルトリアがまた綺麗で人の住める場所になることを願っていた…。

でも、現実はおとぎ話ほど単純で優しいものじゃなくて…。

エルトリアの【死蝕】は止まることなく加速していき、更にはその【死蝕】の影響を受け、最前線で研究を続けていたパパが重い病気で倒れることになった…。

研究の発案者であり、代表であったパパの離脱は致命的で…、エルトリアの復興は、絶望的になった…。

それまでに抱えていた不安や疑念が私の中で膨らみ弾け、それでも【諦めない】ことを無我夢中でやることしか私には出来なかった…。

そんな時に提示された微かな希望…。

遠い宇宙（そら）の果て…、その先に星の未来とパパの命を救う可能性が目の前に出された…。

あの時は、「私が全部救うんだ」って、ただそれだけの想いで可能性を信じて、エルトリアを出た…。

大好きで、信頼できる親友の言葉を信じて…。

その先は…、言われてた通り…。

いろんな人に迷惑を掛けて…、いろんな人を傷つけて…。

自分も…、傷付いて…、。私
のせいなのは分かってる…。

誰のせいでもない…。

私が…、私のワガママとおぼりが…、あんなことを招いてしまっ
た…。

今思えば…、いくらだつてやり方はあつた…。

誰も傷付かなくて済む方法だつて、刃を交えることさえも…、無
かつたのに…。

話せば難なく解り合える人達だつた…。

そう…、私はすぐく焦っていたんだ…。

星の未来が…、何よりパパの命が懸かっていたから…。

誰に迷惑をかけようと、どれだけ自分が傷付こうと…。

だから誰の都合も、未来も、想いも考えず…。

誰の話も聞こうとしなかった…。

そんな私への報いなのか…、親友に1度は裏切られた形で突き放さ
れ、自分がやってきたことへの無意味さと、愚かさを同時に突き付け
られた…。

自分がやってきたことに正当さのカケラもなかったことを自覚し
た…。

例え誰かを救う為でも…、他の誰かからそれを奪ってしまったては何
の意味もないことを…、私はこの過ちから学んだ…。

許してくれるようなことじゃなかった…。

それだけの迷惑（こと）をした…。

あんなに迷惑を掛けたのに…、

その世界は、あつたかくて、優しくて…、

結果…、私達に【希望】をも与えてくれた…。

星の未来を救うことが出来る可能性…、

パパの命を救う可能性…。

私自身と親友を救ってくれたことも…。

ほんとに感謝してる…。

そしてまた、ここに戻つて来れて改めて思うようになった…。

私の犯した罪の重さと、今幸せを得られていることへの疑念…。
そして…、あの人との関係性のことも…。

01 回復の兆し

機械音「ピツ…、ピツ…、ピツ…、ピツ…」

ベッド周りの研究設備の機械音と、生命維持の機械音が呼応しているように音を静かに反響させている。

ベッドには痩せ細った男性、科学者のグランツ・フロリアン博士が眠っています。

惑星エルトリア、この星が長い間抱えてきた【死蝕】の研究をしていた折に、その影響で病の床に伏せてしまったと私は聞きました。

彼の健康状態を計る計器を閲覧、その旨を伝えます。

ユーリ「ん…。数値は良好…。著しくいぢしるとまでは言いませんが、回復が見られます♪実際、お身体の調子はどうですか？グランツ。」

ベッドへと近付き、屈みこんで問う。

体を起こす動作ないまま、顔だけをこちらへ向けてグランツは静かに答えていく。

グランツ「ん…♪ユーリが治療を行ってくれてから…。大分身体が動くようになってきたよ…♪以前は身体を起こすことさえも不可能に思えたけどね…。今では大分楽になった…♪」

ユーリ「もう少し回復が進めば、皆と一緒にテーブルで食事することも出来ると思います♪それまではこのまま安静を保ちつつ回復を進めていければ♪」

グランツ「うん…♪そうするよ…♪」

彼は私に優しく微笑みかける。

以前までは、意識を取り戻すことさえ困難とされていましたが、今では多少弱々しくも意識があり、言葉も交わせています。

私の名前は、ユーリ。

ユーリ・エーベルヴァイン…。
彼、グランツの病を緩和、治療する為に現在も努めています。
グランツの笑顔に、置場所のない罪悪感を胸に感じる…。
原因はシンプルで、だけど簡単には言い表せない…。

ユーリ「……………」

グランツ「ユーリ…?」

ユーリ「あ…、すみません…。その…、」

やっぱり思うように声が出せなくなる…。

口が重くなり、胸に抱えていた物も同時に重くなる。

何とか会話を途切れさせないように考えを働かせるけれど、やっぱり上手く言葉に出来なくて…。

グランツ「…………、あの日のこと…、遠い宇宙の果てでのこと…、エ
レノアから聞いているよ…。大変だったね…。ユーリ…。」

ユーリ「あ…。い、いえ…。私は…。アマタやキリエ…。それに、皆
さんに大変なご迷惑を掛けてしまいましたから…。」

そう…。地球でのことだけじゃない…。

私は、あの日にも…。

エルトリアを離れたあの日にも…。私は止められなかった。

あの日は彼を止められず、あの子に何も説明できないまま…。

そして今度は自分すら止められず…。いろいろな人に迷惑をかけた
…。

あの事件が終わって、ここへまた帰ってきた後でも、いろいろな罪
悪感の渦に包まれ続けている。

大きすぎる私の力が…。それを利用して抗えなかった私の弱さが
…。いろいろな人を傷付けたから…。

グランツ「でも…。いろいろな事があったからこそ…。ユーリはここ

へ戻ってきてくれて…、僕や、エルトリアの未来に再び可能性を与えてくれている…♪」

ユーリ「あ……。」

私の心を読んだかのようにグランツは言の葉を重ねた。

優しい微笑みが私の心にじんわりとあたたかさを与えてくれる。

グランツ「僕にはそれで十分さ…♪過去を振り返って、それがどうしようもなく辛いもので…、償いきれない過去であったとしても…。それを未来の為に活かせている君達は…、本当に素晴らしいと僕は思う…♪過去を振り返ったまま、未来への道を閉ざしてしまうより…、ずっと大変で、素敵なことだ…♪」

ユーリ「ん…♪」

グランツ「ベッドですつと寝ていた僕に云われても…、説得力はないかもしれないけどね…。はは…。」

いや、その言葉にどれ程救われたらろうか…。

弱々しく紡がれた言葉…。けれど、胸に抱えていた重いわだかまりをひときわ軽くしてくれる。

そんな魔法を彼は私に…、いや、私だけじゃない。

みんなにも…、この広い星にさえも…、彼は【救い】を与えてくれるようにしている。

私には、そんな彼を再び元気にする大切な仕事がある。

必ず彼を…、この星の為に…、ううん…、。

これは言葉にしたい…。

はつきりと、彼の前で堂々と…。

ユーリ「アマタヤキリエ、そしてエレノアの為にも…、私が必ずグランツを元気にします…♪必ず…♪」

グランツ「ふ…♪ありがとう♪ユーリ…♪」

ユーリ「はい♪」

優しい笑顔でグランツはまた微笑んでくれる。
けれど、先程のような胸の重みは感じない。
今の言葉は、恥じることなく、迷うことなく出た自然なものだったから…♪

開閉音「ギイイイ…。」

ユーリ「あ…。」

扉の開閉音。

そちらへ目を向けると、扉の前にエレノアが立っていた。
手には植物の苗が植えられた鉢を持って…。

ユーリ「お帰りなさい♪エレノア♪」

エレノア「ただいま♪ユーリ♪調子はどうですか？」

グランツ「ん…♪徐々に徐々にだけれど、回復していつてるみたいだ…♪頑張れば皆とテーブルを囲って食事をする事も出来るかも…、と。ユーリが話してくれたよ…♪」

エレノア「良かった…♪」

心からほっとしたようにエレノアは微笑む。

私も同時に微笑んで、エレノアの持つ植木鉢へと視線を向ける。

ユーリ「エレノア、それは…？」

エレノア「試作の改良緑化ナノマシンを使った結果ですよ♪2週間前後で花の苗が芽を出し、汚染の影響にも負けない根を土壌に張っています♪これはその一歩です♪」

グランツ「そちらも順調なようだ…♪ユーリやディアーチエ達が持ち帰ってくれたデータや魔法が、エルトリアに新しい風を運んでくれる…♪それがこうやって垣間見れてすごく嬉しいよ…♪」

ユーリ「ん♪」

辛い過去を経て、悲しいすれ違いをして…、けれどその先にある未来を私達は生きている…。

未来の為に…、誰かの為に…、

自分達が出来る全てを用いて守り救いたい。

そんな想いが、今もこの星には生きている。

私も…、この星に生きるひとつの命として…。

今度は必ず…、救えるように…♪

エレノア「ユーリ、博士の所には私がいますから、少し休憩にしませんか？」

ユーリ「あ、はい♪えつと、ダイアーチエ達の所へ行ってきます♪休憩もその後で♪」

エレノア「そうですね♪ついでと言っては何ですが、改良ナノマシンのサンプルを届けてくれますか？ほんとは帰ってきた時に見せる予定だったのですが…。」

ユーリ「はい♪分かりました♪きつとみんなも喜びます♪」

02 故郷

椅子に掛けていた上着を羽織り、そのポケットにエレノアから受け取った小瓶型サンプルを入れこみます。

気候については多少の変化が見え隠れするものの、今の時期は暖かい日が多いらしいです。

けれど、荒廃した大地の為、砂嵐などの影響で砂ほこりをはらんだ風が吹くことが多いので上着は必須なのです。

エレノア「ユーリ♪バスケットにオヤツも入れてありますからデイアーチエ達と食べてくださいね♪」

ユーリ「あ、はい♪」

大きめのバスケットをエレノアから受け取る。

見た目通りズシツとした重さで一瞬よろけるものの、何とかバランスを取り、体勢を立て直します。

エレノア「ちょっと重いですが大丈夫ですか？」

ユーリ「はい♪すぐ近くですから♪」

エレノア「レヴィが沢山食べると思って少し多めに作ったんですよ♪」

ユーリ「あはは♪喜ぶと思います♪」

エレノア「ん♪」

忘れ物がないか軽くチェックをして…。

ユーリ「では、行ってきます♪グランツ♪エレノア♪」

エレノア「はい♪」

グランツ「行ってらっしゃい…♪」

ニコニコとしたふたりに見送られ、玄関から揚々と外へ出掛けま

す。

近くの土壌調査をしている皆の所へ…、。

ユーリ「あ……。」

忘れ物…、という訳ではありませんが、3人のいる方とは逆の農場方面へと駆け足で向かいます。

オヤツに合うミルクを調達するためです♪

【酪農場・小屋】

荒廃したエルトリアで暮らす命は…。

私達だけでは勿論ありません。

生態系が不安定になっているこの星では、星の荒廃を助長するような危険な生物もいますが、共存をする為に必要な生物や弱くても懸命に生きている生物もいます。

危険な生物のほとんども、元は無害であったり平穏に暮らす生物であったはずですが、星の荒廃化と共に凶暴化、土地の状態に適応した為の異常進化を繰り返し、今では星を壊す原因のひとつであったりもします。

そんな中でも、土壌の調査や生態系の調査をする上で弱い生物の捕獲や保護は大切なお仕事です。

この小さい農場ではそんな生物を飼育しています。

ユーリ「みんな、おはようございます♪」

みんな…、といっても現在飼育しているのは2頭。
番で飼っている牛科の現地生物。

加工のしやすいミルクを生産するには共存という意味で最も大切な存在です。

星の荒廃により数は絶滅を危惧される程ですが、アマタやキリエが

調査をして、近々10頭くらいの群れがいた形跡があつた所へ保護をしに行くと言っていました。

仲間が増えれば、それだけ生態の調査や繁栄のサポートが出来るようになるので、楽しみです♪

ユーリ「少しだけ、おやつ用のミルクをくださいね♪」

顔を撫でると、ブモーと優しく鳴いてくれました。

いいですよ〜と返事をしていています♪

お乳をきゅつきゅつと丁寧に搾り、小屋から取ってきた瓶の中いっぱいミルクを分けて貰いました。

ユーリ「ありがとうございます♪レヴィ達が喜びます♪」

再び顔を撫でると、撫でた手をペロペロと舐めてくれました♪

どういたしまして〜と言っています♪

また来ますと手を振って、栄養たっぷりミルクを入れた瓶と、エレノア特製のおやつが入ったバスケットを持ち、ダイアーチエ達の元へと向かいます♪

【フローリアン家周辺・荒原】

「キイイイ……ツン………」

ダイアーチエ「ふむ……。ここら周辺は先日採取した地表のサンプルと大分近いな……。改良型の緑化ナノマシンが成功すればここら一帯も緑化の改善が見込めるだろう……。」

魔導書型デバイスを使用し、周辺の地表のデータを解析する。

不純物の濃度は67%。

高い数値だが、我の持つ魔導を用いれば直接的ではないにしろ言葉

通り改善が見込めるはずだ。

勿論、その改善も、今まで積み上げてきた博士の研究成果の賜物だ…。

私の魔導は、その補強に過ぎず、博士の研究無しでは成し得られな
どしなかつた…。

博士が病に伏せることなく、研究を続けて来れていたなら、きつと
成し遂げられていたであろう。

仮の話というのはあまり好きではないが…。

「ヒュー……！ヒュー……！」

デИАーチエ「む……？」

風の切れる音が高く、近づいてくるのを察する。

空を仰ぎ見、小さい影ふたつを視認する。

我が臣下、シユテル、レヴィだ。

シユテル「……………」

レヴィ「王様……♪」

地が響くほどの大きな声でレヴィは我を呼ぶ。

屈託の無い笑みを浮かべるレヴィ、それとは逆に無を貫くような表

情のシユテル。

ほぼ同時にふたりは地に降り立ち、我へと歩み、駆け寄る。

シユテル「王、ただいま戻りました……。」

レヴィ「えへへへ♪」

口元まで上げていたマントの襟元を下げ、シユテルは落ち着き言葉を
発する。

ぴよんぴよんと跳ねるように駆け寄るレヴィは爛々と眼を輝かせ

ている。

ディアーチェ「うむ。その様子から察するに、何か発見があつたよ
うだな？」

レヴィ「え!!？」

シユテル「はい……。」

シユテルの肯定の返事に重なるようにレヴィが驚いた声を上げる。
爛々と輝いていた眼は、これは仰天と言うほどパツチリと開き、1
度シユテル、それから我へと視線が代わる代わるする。

レヴィ「な、何で分かつたの!? 王様!？」

はっ!まさか王様! エスパー!？」

ディアーチェ「何をたわけた事を言っておるか。うぬの様子を見れ
ば一目瞭然であろうが？」

レヴィ「はっ!!」

なんと!という表情を向け、オーバーなりアクションを取るレ
ヴィ。

緩みきつた表情を隠すように顔を手で塞ぐが、時すでに遅いとい
うか…、我でなくとも一目で分かる単純さであつたのだが。

ディアーチェ「して…、その発見とは？」

シユテル「はい…。ここから北西の方向に約700…。

岩石地帯があるのですが、その周辺に生息している植物を調査して
いる所で、僅かながら湧き水の痕跡を発見しました…。」

ディアーチェ「ほう? 湧き水？」

レヴィ「そうそう! シユテルんが言うにはね!

えつと…、オシア…、じゃない! オジア…ス…?

オスシア! あれ? 違ったかな??？」

シユテル「オアシスですよ…、レヴィ。」

レヴィ「そうそう！それぞれ！元々そのオアシスがあつたところなんじゃないかって！」

ディアーチエ「ふむ…。」

シュテル「恐らく岩石地帯を含め、一帯が大きな湖だったのでないかとも思われます…。生息していた植物も水生のコケ科の植物を養分に成長したデータが検出出来ていますから…。」

ディアーチエ「なるほど…。」

レヴィ「ふふくん♪」

誇らしげに胸を張るレヴィ。

まるで自分ひとりの手柄とでもいうかのように大きく胸を張る。

ディアーチエ「ならば水源についての調査が必要になるな。

我等だけでやるに足らずは、今のこの体では些ちかか不安である…。調査はもう少し時が経った後、我等の体が十分に整ってからだな。」

シュテル「はい…。」

レヴィ「あうう…。」

つい意地悪を言いたくなってしまった。

それもあるが、レヴィのやる気を削いだというと聞こえは悪いとして、こやつは時々セーブをしてやらんと、はしやぎすぎて止まらぬからな…。

魔力不足でまだ本調子ではないにしろ、慣れぬ体ではしやぐ事ほど危険なことはない…。

こやつは昔からそういった所が危なっかしいのだ…。

我がキツチリ見てやっておかねばな…。

と、鞭の後には飴が必要であろう…。

ディアーチエ「その為には早く成長する必要がある♪」

朝・昼・晩、我の作る特製料理で早く元通りにならねばな…!!」

レヴィ「ふは!?!王様のりょーり!!」

はいはい!! たつくさん食べる!!

僕、沢山食べて早くおつきくなるう〜♪♪♪」

シユテル「ふふ…、そうですね…♪」

満足な戦闘訓練も今のままでは難しいですし…。

せめてこの体を得た時と同じ背丈、魔力にまで戻さなくては…。」

ディアーチエ「うむ。我等の故郷、このエルトリアは今も芳かんばしくない

状況であるが、我等が命を受けた始まりの場所だ…。であるが故か

どうかは分からぬが、回復も予定より遙かに順調である…。ここで再

び成長を成せるというのも一興であるな…♪」

シユテル「ん…♪はい…♪ディアーチエ…♪」

レヴィ「エへへ〜♪♪♪」

エルトリアでは、最初の《始まり》を得た。

そして、2度目の生は地球で始まった…。

人としての生…。

弱くて小さかった存在ではなく…、

強く、そして絶大なる力を持って得た第2の生。

最初は《救済》も《守護》も見失い、

誰に向けてよいかも分からぬ刃をただ振り回しただけであった…。

だが戦いの中でそれに気付き、我等は守り救済すべき主人と本当

の意味で再会できたのだ…。

それも…、地球のあの魔導士共がいたからこそその結果であるのは違

いない…。

感謝すべきであろう…、が、素直に礼を言うのも憚はばかられる…。

あの子こがらす鴉には特に…。

我がちよつと隙を見せれば、我をまるで赤子のように扱いよるから

な…。

ここへ戻る際もいろいろ押し付けてきおつてからに…、…。

まあ、貰える物なら貰ってやらなくもない…。

王として堂々と受け取ってやったがな…♪

陽の光に照らされて輝く長くてゆらゆらとした金髪の少女が駆け
てくる。

我等が主人、ユーリの姿が目映る。

レヴィの声に応えるように、右手を大きく振りながら、左手にバス
ケットを持って、こちらへとやってくる。

「タッタッタツ…！」

ユーリ「みんな♪お疲れ様です♪」

少し息を切らしながらも、ユーリは無垢な笑顔はそのままに労いの
言葉をかけてくれる。

シユテル「はい…。ユーリも、グランツ博士の健康チェック、お疲
れ様です…。」

ユーリ「いえいえ！グランツの健康チェック及び治療は、私の大事
な仕事ですから…♪」

デアーチエ「ん…♪」

言うように、博士の健康維持はユーリの大切な仕事。

母上様も、ユーリが治療を行うようになってからどんどん良くなっ

てきていると仰おっしゃっていた。

流星は我等が主人と、誇りを持って言える。

現在の緑化プログラムがここまで実現可能にまで至っているのは
先も言ったが博士の努力と研究あつてのものだ。

言葉こそ少ししか交わしてはおらぬが、突然来た我等をすぐ受け入
れ迎えてくれたこと…、積み重ねた研究のデータを見れば博士がどれ
だけ尊敬に値する人間かはすぐ理解出来る。

小さき幼子であった彼が、この星を支えるすべてを担っていたの
だ。

尊敬せずにはいられぬ。

「そんなのいいのに」と博士なら笑うだろうが…。

ユーリ「あ、これ♪エレノアから預かったオヤツです♪みんなで食べましょう♪」

レヴィ「わはく♪♪♪タイミングばっちしだあく♪」

ぴよんぴよんとレヴィが跳ねる。

今にもユーリの持つバスケットへとかじりつきそうさ。

ディアーチエ「うむ♪丁度戻ろうと思っていた所よ♪そろそろレヴィの充電が切れそうであつたからな♪」

レヴィ「いやく♪僕、照れちやうなく♪♪♪」

シユテル「褒めてはいませんよ…、レヴィ…♪」

レヴィ「ヴえ!?!ウソっ!?!」

ユーリ「アハハ♪」

ディアーチエ「せっかく、ユーリが持ってきてくれたのだ。見渡す限り味気ない所だが、外で食べるとするか。」

シユテル「そうですね…。ここは割かし平地ですのでレジャーシートさえ引けば…。」

ユーリ「と行って、それも持ってきてあります♪」

レヴィ「僕もく♪♪♪」

ディアーチエ・シユテル「え?？」

レヴィ「ん???♪」

思わぬ所から声上がり、我もシユテルも思わず声を出す。

レヴィはキョトンと我等の顔を見つめる。

ディアーチエ「レヴィ、何故うぬも持っておるのだ…?？」

レヴィ「え?だつていつでも外でご飯食べられるよくにしとかないと♪備えあれば憂いなし!だよ♪♪♪」

シユテル・ユーリ「お〜〜。」

尤^{もつと}もらしい言葉を放つが、実にレヴィらしい。
なるほど、いつも調査に出る際、こやつが準備に手間取るのはこれ
のせいもあつて…、か。
いつも不要な物は入れて来ぬようにと叱っておったが、存外例外と
いうのもあるようだ。

デИАーチエ「ふむ。ではユーリとレヴィのシートをふたつ合わせ
て使うとするか♪」

ユーリ「はい♪」

レヴィ「ラジャ〜♪♪♪」

フワツ！とふたつのレジヤシートが拡がる。

ユーリのクリーム色をしたシートと、レヴィの空色のシートが重な
る。

風で飛んでしまわぬよう、調査用の荷物を四隅に置き、シートを固
定すれば完璧である。

デИАーチエ「よし。」

レヴィ「僕とユーリのシートの色、合わせたらなんかクリームソー
ダみたいで美味しそうだよね〜♪♪♪」

じゅるりと涎^{ヨダレ}がレヴィの口元に見え隠れする。

もう辛抱たまらぬといった様子だ。

デИАーチエ「うぬはそればかりだな…、。」

レヴィ「エヘヘ〜♪♪♪」

ユーリ「沢山ありますからいっぱい食べてくださいね♪」

大きなバスケットを開くと、多種多様な彩りが中いっぱい、幾重

にも重なっていた。

開いた瞬間、心地よい香ばしさが香ってきて、思わず我も食欲を刺激されてしまう。

レヴィ「わくわく♪♪♪サンドイッチだあ〜!!!」

レヴィは瞳をキラキラさせ、その視線は既にサンドイッチへと釘付けになってしまっている。

シユテル「これは…♪美味しそうです…♪」

ディアーチエ「うむ♪戴くとしよう♪」

ひとりひとり手を伸ばし、それを口へと運ぶ。

レヴィに至っては、両の手にサンドイッチを持ち交互に頬張っているが…。

レヴィ「むぐむぐ♪美味ふい〜♪♪♪」

シユテル「ん…♪よい味です…♪マスタード?が効いていますね…♪」

ディアーチエ「シユテル、飲み物を用意して置いてくれ。レヴィが喉に詰まらせる前にな。」

ユーリ「あ…♪それなら、これがあります♪ここへ来る前ミルクを頂いて来ましたから♪」

ユーリは、提^さげていたポシエツトの中から瓶を取り出す。

レヴィ「お!?!もしかしてモードレッド達のミルク!?」

ユーリ「もーどれっど???」

そういえば、アマタとキリエが保護してきたあの二頭にレヴィが何やら名前を付けておったな。

ディアーチエ「随分と仰々ぎょうぎょうしいな…。」
レヴィ「カツコいいでしょ！そして強そう！あ、もうひとりシユテるんに決めて貰いました♪パチパチ♪」
シユテル「僭越ながら…。天地創造という意味のクレアシオンと名付けさせて頂きました…。これからのエルトリアの復興へ願いを込めて…。」
ディアーチエ「う、うむ…。モードレッドにクレアシオン…。どちらとも大層な名前であるな。」

これから繁殖やら他の個体の保護を行っていけば、もっと数が増えるというに…。

が、今ここでは貴重な命。

尊さを忘れず、共存することを前提として長く向き合ってゆかねばならぬ…。

そういった意味ではシユテル、レヴィの行いは間違っていない。むしろ人道的で、我としては嬉しく感じている。

自然に優しく馴染めることこそ、我等が真にここへ戻ってきた証明として刻まれてゆくようで…。

ディアーチエ「シユテルも、レヴィも、よく世話をしておるからな。身近な命を守っていくことが今我等のすべき事。我は王として鼻が高いぞ♪」

シユテル「ん…♪恐縮です…♪ディアーチエ…♪」

レヴィ「エへへ♪王様のナデナデ♪」

ユーリ「ふふ♪」

温かな風と時間。

流れるそれらに今、我等は確かに生きている。

取り戻すことの出来た時間があれば、失ってしまった時間もあつた…。

今更もとに戻せぬことなど解りきっている…。

だからこそ、取り戻せた時間だけでも次は失わぬよう、こうして広げた手を伸ばし触れればよい…。

触れて…、感じて…。

この温もりを二度と失いたくなければ、おのずと我は強く、そして守るべきモノを手放さぬ強固さを放てるだろう。

溶け合った温もりを強さに、我等が大切な恩人^{ひと}を守れたあの夜のよう…。

03 傷痕

…今日は北の地域の土壌調査なのですが…
「あ、ごめん！ママの手伝いを頼まれてて！」
…そうだったんですね♪分かりました♪…

…キリエ、ご飯できましたよ？…
「ごめん！今手が離せなくて！後で食べる！」

…ん♪分かりました♪頑張ってくださいね♪…
…キリエ、水質調査の資料で聞きたいことが…
「後で文書にするからそこに置いておいて!!」

…あ、はい。分かりました。…
…キリエ、今日は？…
「あ…。今日もちよつと調べ物が…。」
…ん。分かりました…

…今日は？…
「ごめんー！」
…一緒に…
「ごめん。」

…今日も？…
「…ごめん…。」

《本当に…、ごめん…。》

キリエ「…最近、そんなのばっか…。」

東の地域の土壌調査。

元は広大な森がそこにあったであろう残骸があちらこちらに見て取れる。

葉も落ち、枝も折れ、根も枯れた幹を留めることしか出来ない程弱りきっている。

留まりきれず折れた幹は、腐葉の海に漂うように倒れ込み、永く空を仰いでいたことを思わせる。

そんな枯れ木の群がおびただしく並び、存在している中、より空虚な私がそこにポツンと立っていた。

ふらついている訳でも、疲れた訳でもないのに私は枯れ木のひとつに手をつき、寄りかかっている…。

空虚であるというのに間違いはない…。

けれど、私の中には空虚を埋める為に施された淀んだ空気がそこにあった…。

淀んだ感情、後悔や責任、罪の意識…。

どれも心を埋めるには値しない物ばかりが私の中に存在している…。

後悔…。

もうしないと決めた。そう努力しようと願った。

責任…。

これからも背負っていくと決めた…。そう誓った。

罪の意識…。

消えた…、乗り越えられた…、はずだった…。

後悔…、責任…、また繰り返し頭へと流れる。

罪の意識が今でも心にベツタリと張り付いている。

それをトリガーに後悔や責任の重さが心にまた深く刻まれていく

…。

キリエ「ん……………」

地球であつた、あの事件…。

あれがあつたからこそ、私は変わることが出来た。

無謀で我が儘だつた私を救ってくれた。

絵本のような何でも叶う世界が無くても、希望を与えてくれる存在がいてくれるんだとも教えてくれた。

心が折れかけて、でも立ち上がって、同じように苦しんでいた大切な親友を助けることが出来た…。

その娘とも分かりあえて、今度は私から希望を与えてあげることが出来た…。

そんな大変なことがあつて、大切なことを教わって、だからこそ乗り越えられたと思つてたんだ…。

けれど……………」

やっぱり私の周りの現実には、おとぎばなしのようにはいかないみたい…。

改めてエルトリアへ戻ってきてそれを実感した…。

取り戻せた平穩、新たに増やせた仲間、希望。

何もかもがきつと、良い方向へ向かつていつてる…。

私も、それが嬉しくてたまらない。

諦めず、今まで努力してきたことがやっと報われようとしているから…。

それを今ではみんなも共有して、助け合っている…。

なのに……………」

「これでほんとに良いのか？」

「今こんなに幸せで良いのか？」

という言葉が心にのし掛かっている。

罪の意識が拭いきれていないことを、エルトリアへ戻ってきて気付いてしまった。

最初は気のせいだと思ってた…。

あんなに大変なことの後だし、余韻はそりや残るよねって…。

そんな軽い気持ちとして心の隅にただ置いていた。

けれど、これがそんな軽い物じゃないことに、今は気付き苦しんでる…。

だから私は…、アミタに…、お姉ちゃんに…。

同じことをしてしまっている…。

もうすれ違わないように、歩み寄ってお互いを助け、気遣えるようになろうって…。

少なくともアミタはそうしてくれている…。

今まで、いつもならひとりで行くような危険な場所にも私に声を掛けてくれるようになった。

今までアミタが私をそこへ連れて行かなかったのは、全部私の為…。

「頼られないのは頼りないと思っっているから…。」

そんな醜いトゲを、私はずっと胸に刺したまま、お姉ちゃんアミタの気持ちを理解せずにただ嫌っていた。

そののなんて馬鹿なことか…。

今でもそんな自分があったことが嫌になる…。

今ではアミタが私の気持ちを優先してくれて、一緒に行こうと誘ってくれる…。

けれど…、何故か私はそうしようとしない…。

伸ばしてくれた手を掴まず、引っ込める…。

前とは逆…、でもこの痛みは同じもの…。

自分の中の醜い感情なにかが、トゲが抜けたハズの癒えないまま残った傷痕に流れ込み、ジクジクと痛みを私に自覚させる。

その痛みが消えないまま、塞ぐことのないまま、もう1ヶ月近く経ってしまっている。

ほんとは変わるべきなのに…。

私が手を取れば済む話なのに…。

キリエ「……そろそろ戻らなきゃ…。」

ここら一帯のデータは既に収集済み。

何なら小一時間前に終わってる。

土壌の調査や植物・動物の繁殖状況…。

それら含め、サンプルの摂取も問題なく終えられた。

ただ、戻ったらいつも通りの《フリ》をしなきゃダメだから…。

私は変わったんだって、もう何ともないよって、証明するために笑わなきゃならない。

それが今は辛くて…、少し心の準備をしなきゃ笑うことも出来なくなってる…。

今はそれに必死になってる…。

お姉ちゃんも、王様達も…。

みんな変わってるのに、私だけ変われてない…。

それを悟られたくなくて、知られたくなくて、隠し続けてる…。

それが悪いことだって知りながら…。

キリエ「こんなことなら…。戻って来るんじゃないかって…、かな…。」

目頭が熱くなる。

自分で呟いておきながら、知らない誰かに核心を突かれたように心を抉られる…。

私の本心は、「ここに戻りたかった」に決まってる…。

けれど、変わってないことに気付くくらいなら、戻って来ない方が幸せだったかもしれない…。

心と気持ちの相反に、私は今…、苦しんでる…。

04 後悔と、あの日の繋がりと…。

「エルトリア西地区」

アマタ「大きな地盤の弛みゆるが観測されたのは、この地域ですね。ん…。」

見渡す限りの荒野…。

けれど、平地とは程遠く、地面が所々隆起しているのが見えます。

「土壤調査用の小型計測器を地面へと置き、周辺の土壤状況を調べます。」

アマタ「不純物濃度87%…。他の地区より高いですね…。地盤の弛みはあるものの、《彼等》の痕跡は見えません…。」

《彼等》…。

この荒廃したエルトリアに適応してしまったが故に、今では星の汚染を誘発・拡大させている現地生物達。

異常進化の末、攻撃性や凶暴性に特化したり、他の無害な生物を捕食し過ぎたり、共食い等を誘発したせいで、土壤汚染や星の生態系を崩すことに大きく関わっている。

彼等は地面に潜って移動する習性の者もいます。その為

、今ここでは痕跡が特には見受けられませんが、可能性がないわけではないでしょう。

アマタ「地面の隆起の状態を見るに、観測された時からそれほど時間が経ってないように見えます…。食べ物や水を探しているのですね…。」

彼等も、異常進化し、凶暴化していたとしても、元々はこの星の仲間です…。

駆除という形でその命を屠ほぶつてしまうことしか、彼等に与える救済がないことがとても悲しくて…。

それも最早綺麗事で、『星を救う為の仕方なき事』と、救済だなんて口が裂けても言えないのかもしれない…。

空腹に苦しみ食べ物を探したり、喉の渇きを潤すために水を求めたり…。

私達だって当たり前にするようなことを、『生きる』ということをして、私は彼等から何度も奪ってきました…。

彼等にとつて、私は大罪人のように映ってしまうでしょうね…。

アミタ「ごめんなさい…。」

だから私は…、ひとりで彼等に刃を向け続けて…。

その責任を、私だけが背負っていても構わないとさえ思っていました…。

だから私は…。

アミタ「……………いえ、違いますね…。これは、ただの私のワガママでしかありません…。」

責任ですとか、罪であるとか、そういう理由で遠ざけていた訳ではありません…。

危険な目に遭わせたくないから…、ただ命を奪うだけの姉の姿を見て欲しくなかったから…。

でも、キリエを…、妹を遠ざけていた本当の理由は……………。

アミタ「ん…………。」

「ピピピ……………ピピピ……………」

アミタ「え？あ…………。」

考え込んでいた私を現実呼び戻すかのように、通信の呼び出し音が耳に響きます。

顔を横にふるふると振って、眉間に寄っていたであろうシワを元に戻し、不自然に映らないよう、声も自然なトーンで通信に答えます。

「ピッ……！」

アマタ「はい！アマタです！」

着信に応答すると、映像には大きく母さんの顔が映りました。

母さんのニコニコとした顔を見るに、特に緊急の用という訳ではなさそうです。

エレノア「エレノアです♪調査の方は順調ですか？アマタ♪」

アマタ「あ、はい！地盤の緩みや土壌環境自体は確認出来たのですが、対象との接触はありませんでした…。」

エレノア「そう、ですか…。けど、母さんとしては、嬉しいお知らせですよ♪アマタ娘が危険な目に遭わないことが一番ですから♪」

アマタ「はい…♪ありがとう、母さん…♪」

優しい言葉に機械的に作っていた顔が、ほんとに解ほぐれてしまいます。

そんな顔を見て、さらに優しくニコツと微笑む母さん。

父さんの事で、あまり見せなくなっていた母さんの笑顔を、最近よく見られるようになったのは、とても大切に素晴らしいことだと感じます…♪

エレノア「ん♪細かい調査が必要ならそのまま続けてもいいんですが、特別無ければ1度研究所に戻って来ても大丈夫ですよ？夕飯前なので少しだけですが、おやつも用意してあります♪ユーリも先程、

デイアーチエ達と食べる為に出掛けましたから♪」

アマタ「そうなんですネ♪分かりました♪では1度戻って休憩したいと思います♪そういえば、急いで飛び出したので、携帯食も持ってきていませんでした!」

エレノア「ふふ♪」

アマタ「西地区（こく）の探知機のデータを更新してからすぐ戻ります♪今度は皆にも協力してもらって♪」

エレノア「そうですね♪」

あ…。キリエから何か連絡はありましたか?」

アマタ「え……?」

先程まで考えていたキリエのことについて母さんの方から話が振られ思わず動揺してしまい、訊き返してしまいました。

エレノア「先に調査に出ていたハズのキリエから、まだ連絡がないんです。ひよつとしたらと思つて…。」

アマタ「すいません。私の方にもキリエからの連絡は来ていませんね…。」

キリエへの心配もありましたが、それより何より、複雑な感情が表情に出ないことを気にしていた私は、単調に答えるしか出来ませんでした。

キリエへの自分の後ろめたい感情を問いただされているかのよう
に、緊張感がじわじわと背中に伝わっていたからです。

エレノア「大丈夫でしょうか…?キリエにもこちらで連絡しておいた方が良いでしょうか?」

アマタ「あ、いえ!えつ…と、キリエも調査に思ったより熱が入っているのかもしれない…♪最近、土壌調査や水質調査で忙しくて部屋に籠っていたりしていましたから…♪」

エレノア「そう、ですね…♪それならメールを送るだけにしておき

ます♪メールなら調査の邪魔をしなくて済みますし♪」

アマタ「はい♪そうですね…♪それが良いと思います♪」

エレノア「アマタも、気をつけて帰ってきて下さいね♪」

アマタ「はい…♪母さん…♪」

エレノア「ん♪」

最後も、母さんは優しく微笑んで、通信が切れる。

母さんの優しい笑顔が目に霞んで残ったまま、キリエの事を想う…。

本当は…、キリエにも声を掛けてあげたかった…。

調査の邪魔になっただけとはいけないとか、そういう理由だけで声を掛けたのではなく、《私が声を掛けるのが怖かったから》だと思いません…。

母さんが連絡を取ってくれと言ってくれたことに、内心ホツとしました…。

けれど、そう思ってしまった事に罪悪感が拭えなくて、母さんの提案を無下にしてしまったんです…。

私から…、お姉ちゃんである私から声を掛けるべきなのに、そうするとも言えずに、どちらともいえない弱い私を強く自覚しています…。

キリエなら大丈夫…、そんな今では言い訳にしかない言葉が頭に浮かんで、私を無理矢理納得させようとしている…。

これでは駄目だと分かっているのですが…、どうしても思うように整理がつかないでいるんです…。

声を掛けて、またキリエに離されるのが、今では怖くてたまらない…。

あの日のことが酷く鮮明に思い出されて、キリエのあの顔をまた見るのではないかと怯えている自分がある…。

ここへ戻ってこれて、キリエも歩み寄ろうとしてくれているのがよく分かる…。

その必死さも、努力も、私は分かっているつもりなのかもしれません

ん……。

そう思ってしまうほどに、私は鈍くて思い違いをしてしまうことが
沢山あって…、今ではそれがあの日に繋がる事を恐れている…。

けれど…、それでも私の心は疼いてしまつて、何も言わないで待つ
ことが出来なくて…。

だからついつい歩み寄ってしまう。

これは、キリエが一番嫌っていた子供扱いそのものなのに…。

子供扱いよりひどい、最早見下しにすら見えてしまう私のこれは
……。

どうすれば消えてなくなってくれるんでしょう…？

05 変わらない痛み、拭えないあの日

【グランツ研究所】

「ブロロロロ…、キキ…ッ！」

移動用の車両から降り、研究所の玄関へと歩を進め、ガチャリと木製の扉を開く。

砂ぼこりが中に入り込まないように、すぐ扉を閉めるのも忘れずに。

砂ぼこり防止用のフードを下ろして、コートを玄関横のコート掛けに引っ掛ける。

??? 「キリエ…♪」

キリエ 「あ…、…、。」

左正面から聞こえてきた優しい声、私のママの声。
腰掛けていた椅子から腰を持ち上げて、私の方へと歩み寄ってくる。

エレノア 「お帰りなさい♪キリエ♪」

キリエ 「うん、ただいま、ママ…♪ごめんね、運転中だったからメールの返信出来なくて…。」

エレノア 「ううん、いいのよ♪あなたが無事で帰ってきてくれたらそれで…♪」

キリエ 「ん…♪うん…♪」

フードを下ろした時に跳ねた髪と、薄く乗っていたであろう砂ぼこりを、ママが優しくパツパツと払い整えてくれる。

優しくして、私のモコモコなくせつ毛越しでもふんわりと暖かさが伝わってくるようだった。

「チクン…ツ…！」

キリエ「……………ツ！」

エレノア「ん？どうしたの？キリエ？」

キリエ「あ……、ううん！何でもないよ…♪」

エレノア「そう？」

キリエ「うん…♪」

また……。

暖かい心に触れるだけで、幸せな自分を感じてしまうことで、私の中の傷痕が疼き出す。

向けられる笑顔を、誤魔化しの笑顔で取り繕うことにも胸が締め付けられる…。

でも、そうせずにはいられない…。

普通でいられなきや…、変わっていなきやダメなんだ…。

??? 「キリエ…。」

キリエ「え…？あ……。」

奥で弱々しくも優しい声が耳に入ってくる。

ママが笑顔で小さく頷いて、私は声の方へと歩み寄る。

痩せこけた頬の、私と同じくせっ毛を持った声の主がベッドに寝て、私が近寄ると微笑んでくれた。

キリエ「パパ、ただいま…♪」

グランツ「うん…♪おかえり、キリエ…♪」

ベッド横の椅子に腰掛ける。

私のパパ、グランツ・フローリアン博士。

惑星エルトリアを緑でいっぱいにする計画の途中で、病気にかかって、今ではベッドに寝たきりになってしまっている。

でも、パパの体調は最近どんどん回復していつてるみたい…。
ユーリや王様達のおかげ。
あの事件があつたおかげ…。げ…。

キリエ「ん……。」

考えるのを止める…。

心で呟こうとした言葉でさえ噛み殺してしまう。

それは思ってしまったてはいけないこと…。

結果が良かったら全部良いんじゃないことは、それこそあの事件があつた今では、十分理解してる。

その結果さえ、今では虚ろうつろになつてしまつて、今の自分のあり方に疑問を持つて苦しんでいる。

キリエ「…ん。体調どう？パパ…♪何だか今日はいつもより元気そう…♪」

グランツ「分かるかい？今日は特に体が軽いんだ…♪ユーリやママ、王様達のおかげかな…♪」

キリエ「ん…♪良かった♪」

本当に…、それだけは心の底から嬉しいって思える。

パパが元気になれば、エルトリアの研究も更に発展化して、新しい調査の目処も立てられる。

そんなこと以上に…、家族で居られる時間がもつと増えることが私は嬉しい…♪

だけど私には、そんな心の裏に張り付いたモノをずっと気にしていかないといけない…。

それだけが…、…。

グランツ「キリエ…。」

キリエ「ん…？」

グランツ「何か、困っていることがあるのかな…？」

キリエ「え…？…？」

エレノア「あ…？…。」

え…？…？何…？…？

パパが何を尋ねてきたのか最初は分からなかった。

遅れてそのあとに、パパが《私の隠していたモノ》に気付いていたことを理解した。

キリエ「え…つと…、、」

まだ、何も話していない。

隠しているのがバレないように、笑顔でいれていたはずなのに、パパは私にそう質問してきた。

グランツ「話してくれないかな…？」

大丈夫…。頼ってくれていい…♪

僕達で良ければ、話を聞くよ…♪」

キリエ「あ…？…。」

エレノア「ん…？…♪」

とても優しい笑顔を私に向けてくれるパパとママ。

気付いてくれたこと、訊いてくれたこと。

どっちも嬉しくて胸がきゅつと締め付けられる。

でも、パパとママだからこそ、私の抱えたコレを話すのが怖いんだ

…。凄く怖い…。

でも…？…、、。

キリエ「…？…？私…。やっぱりダメな子なのかもしれない…？…。」

グランツ「ん…？…？」

言葉が自然と紡がれていく。

心で怖いと思っっているのに、何故か言葉が止まることなく溢れていく…。

キリエ「私、勝手なことばかりした…。ひとりで思い悩んで…。ひとりで勝手に決めて…。間違っ…。いろんな人にも、お姉ちゃん達にも、沢山迷惑をかけた…。」

エレノア「ん…。」

キリエ「だけど、皆に助けってもらって…。これじゃダメだって…。自分が本当に大事なことをしなきゃ…。だから変わろうと思えて…。」

事件が終わって…。大切な友達とも仲直りできて…。

ママとパパのいるエルトリアに帰ってこられて…。やっと幸せになれるんだって思ってた…。」

グランツ「うん…。」

キリエ「でも…。私、変わってなかった…。!!胸にズキズキって痛みがずっと残ってて…。!みんなで笑ったり、パパやママに優しくしてもらったりする度に、ズキズキって痛むの…。」

胸を押さえながら訴える。

視線はシワになったベッドのシーツに釘付けになったまま、段々と大きくなる自分の声に気付いても止められないでいた。

キリエ「それが苦しくて…。!悲しくて…。!痛くて…。」

痛くて…。そう…。ただただ痛む、この胸が…。

心が痛いんだ…。

変わっていない自分が悲しくて…。

変われていたと思っっていた自分が情けなくて…。

それを皆に隠していることも後ろめたくて余計に苦しくて…。

キリエ「だから…、お姉ちゃんにも今、ひどいことをしてる…！
昔の私と何も変わらない…！

お姉ちゃんを傷付けて、勝手にまた自分で突き放して…！

私の為に手を伸ばしてくれてるのに、私は怖がってその手を掴めな
いの…！

それが…、辛くて…、辛くて…、辛くて…、辛くて…。」

視界がぼやける。

シーツのシワが歪みに変わって、じんわりとした熱さが目に溜まっ
ていく。

目を閉じると、頬を伝う感触だけが《涙を流している》ことを私に
感じさせる。

言ってしまった…。

ずっと抱えてきたことをこんなにあっさり…。

もう後には戻れない…。

悲しみや辛さをただ無我夢中で吐き出した。

パパとママの顔が見れない…。

顔向けできないという意味でもあり、涙で眩んで、もうどんな顔を
しているのかも分からないから…。

きっと不安そうな顔で私を見て…。

また困らせてしまっている…。

きつともう…、私は…。

キリエ「私は……！」

「スッ…。」

キリエ「え……？」

……

「ヒュオオオオ……ッ!!!」

環境適応防護服・フォーミュラスーツを装着し、高度を保ちつつ、地面を見下げ眺めながら空の帰路を辿っていきます。

荒野に次ぐ荒野…、視界に入ってくるのはそればかりです。

ずっと先を見れば、ただ一ヶ所、緑色の大地が目に見えます。

緑のほぼ真ん中、丘の上にポツンと私達の研究所いが見えます。

今見える緑は、2度目の魔法…。

1度目は、父さんの魔法で生み出した緑。

エルトリアの大地を研究して、その第一歩の成果。

研究所の周りだけでしたが、それでもそれを保つていられることは誇らしくて、いつかここみたいいに、エルトリア全部を緑でいっぱい出来たらという希望にもなっていました。

でも、父さんが病で倒れて、母さんや私だけでは十分な研究や対処も出来なくて…。

キリエも、上手くいつていたはずの改良が急変して、大好きな花が枯れ果ててしまったことをひどく悲しんでいましたね…。

それだけエルトリアの大地や植物は、不安定なもので維持が大変で、父さんはほんとに凄いと…。

それと同時に、改めて私には何も出来ないんだと気付かされました…。

私達の緑キの魔法ホは…、そこで1度失われてしまいました…。

でも、今日の前には緑が戻っています…♪

王様達やユーリがもたらしてくれた奇跡。

これが2度目の魔法…。

ユーリの魔力的治癒で、父さんの調子も段々と良くなって行って、広がる緑がそれを象徴しているかの様です…♪

この魔法を2度と失わない為にも…、私達は力を合わせて頑張っていかなければなりません。

もつともつと緑が広がって、花が咲き乱れるほど緑化が進めば…、キリエも…。

アマタ「ん……。」

駄目……、ですネ。

自然と時が解決してくれるだろうという甘え……。

それが、私の中にまた存在してしまっている……。

いつか解決してくれる……。

いつか分かってくれる……。

そんな甘え、もう切り離さないといけないのですが……。

どうしても勇気が持てなくて……。

怖がっているんだと思います……。

私も……、そしてキリエも……。

??? 「……タア……！」

アマタ「ん……？」

??? 「ミー……、タア……!!」

アマタ「今何か聞こえたような……？」

??? 「ア……ミー……タア……!!!」

アマタ「あっ……！」

研究所近くのもの、まだ緑化がなされていない大地。

そこにピョコピョコと跳ねる水色が見えました。

見間違ふことはありません。

そう、レヴィが私に気付いて大きく声を掛けてくれたみたいです♪

アマタ「レヴィ……♪あ、それにみんなも……♪」

レヴィの他にも、王様、シユテル、ユーリの姿が…。急降下して、フォーミュラスーツをパージ、みんなのもとへと降り立ちます。

レジャーシートの上に広がるお皿とコップ、そして食べかけのサンドウィッチが目に見えます。

どうやらみんなでピクニックをしているみたいです♪

レヴィ「やつほく♪」

デИАーチエ「うぬはまた大声を…。耳が痛くなってしまったぞ…。」

レヴィ「エへへ♪ごめくん、王様く♪」

デИАーチエ「全く…。」

アマタ「ふふ♪」

私のせいでレヴィが怒られてしまいました。

申し訳ない気分になりながらも、微笑ましくてつい笑みが溢れてしまいます♪

シユテル「調査の帰り、ですか…?」

アマタ「はい♪反応があつた西地区の方で先程まで調査を、それまでは近くの土壌調査を行っていました♪」

デИАーチエ「ふむ。シユテルとレヴィもその辺りの調査であつたか?」

シユテル「私達はそこより少し北の地域ですね…。」

レヴィ「うんうん♪」

アマタ「そうだったんですね♪」

ユーリ「お疲れ様です♪アマタ♪

あ、美味しいミルクがありますよ♪

それにサンドイッチも♪」

アマタ「わ♪ありがとうございます♪」

ユーリが薦めてくれたコップを受け取り、もう片方の手でサンドイッチも頂いて…。

母さんがおやつを用意してくれていると言っていたのですが、ユーリの好意を無駄には出来ません！

これひとつだけ頂くことにします♪

アマタ「頂きます♪

んくんく…、んん♪

すごく美味しいです♪」

ユーリ「ん♪」

まったりとした口当たりがクセになるほど濃厚なソレは、ジワジワと体にエネルギーを与えてくれていているみたいでした♪

あまりの美味しさに顔が綻ほころんでしまいます♪

レヴィ「それ、モードレッド達のミルクなんだよ♪♪」

アマタ「あ♪やっぱりそうだったんですね♪」

私達が保護してきて、レヴィとシユテルが名付けたあの子達。

群れとはぐれ、サンドワームが群生している地域で助け保護したあの2頭を、調査や研究で忙しい私達の代わりにふたりがよく面倒を見てくれて♪

保護した時は、怯え、怪我もしていたせいで満足にミルクも出ない体でしたが、今ではすっかり元気になってくれていきますね♪

アマタ「こんなに美味しいミルクが飲めるのも、レヴィ達のおかげですね♪本当にありがとうございます♪」

レヴィ「えへへ♪えっへん♪」

シユテル「ふふ…♪」

でも、サンドイッチを持った手は胸の所で止まり、開けていた口を唇を噛むように抑え込まずにはいられませんでした……。

頭の中をいろんな思考が巡ります…。

キリエが無事に調査を終えて帰ってくれていたことに対して、私は嬉しいと感じながら、複雑な気持ちを抱いていました…。

レヴィが私に気付いてくれなければ、研究所でキリエと鉢合わせしていた…。

先程まで巡らせていたキリエに対しての想いや、私の弱さを含めた感情を見せたくないという想いが複雑に絡み合って……。

多分、キリエと会ってしまったら、今の私では上手く表情を隠せない…。

嘘が下手な私は、キリエに自分の弱さを悟られるのが怖くて…、だから会わなくて良かった、とさえ思ってしまった……。

こんな事では私は…、私達はいつまでも……。

??? 「……………い…。」

アミタ「え……………?」

06 溢れた想いの先に……

キリエ「え……?」

歪んだ視界に、ぼやけた肌色が近付いてくるのが分かった。

それは私の頬を撫で、涙を拭ってくれる。

あたた……、かい……。

優しく頬を撫でた温かい感触は、そのまま頬に留まって、撫で続ける。

涙が少し晴れて、ベッドのシーツから肌色を瞳に映し、頭をゆつくりと上げる。

そこには……、柔らかいまなざしで私を見つめるひとりの男性……、ううん、私の……、パパの優しい笑顔が見えたんだ……。

グランツ「ん……♪」

キリエ「あ……、。」

優しく、私の全部を包んでくれるような瞳。

懐かしくて、でもずっと私を見てくれたような……、そんな不思議な感覚。

その感覚に、また瞳が熱くなって涙が溢れてしまいそうになる。

グランツ「キリエ……、ありがとう……。

ずっと……、大変だったね……。」

きゅつと、頬に留まった温かい手に力が入る……。

じわじわと流れる涙を手のひらで受け止めて、涙が溜まるごとに温かみが増すのが分かった……。

優しい顔のまま、パパは私だけを見つめて言葉を重ねてくれる……。

グランツ「自分の気持ちを伝えることは……、凄く難しく、勇気のあることだと僕は思う……。

キリエの素直な気持ちが聴けて、僕は安心した……♪」

キリエ「パパ……。」

グランツ「変われないことが辛くて……、苦しくて……。

だけど誰にも言えなくて……、。」

そんな気持ちで、ずっと心が痛かったんだね……？
キリエ「ん……、んん……。」

私は、弱々しく小さく頷く。
瞳を閉じて、涙がまたポロポロと頬を伝う。

グランツ「キリエは……、自分が変わっていないことが辛いんだよね……？」

キリエ「ん……。」

グランツ「うん……、。。。」

キリエ、良いことを教えてあげよう……♪」

キリエ「え……？」

優しい微笑みから、パパは、くしゃつとした笑顔に変わって、言葉をゆっくり丁寧に紡いでいく。

グランツ「《変わらないこと》、《変われないこと》は……、何も悪いことなんかじゃないんだ……♪」

キリエ「どう……、して……？」

《変わらないこと》が、どういふことか知ってる……。

何も踏み出せないこと……。

変わらないと強くなれない、誰も守れない……。

だから私にとって、《変われないこと》が一番苦しくて……。

なのに……、。。。」

グランツ「《変わらないこと》を悲しむことが……、自分を変えたいと思った時に……、一番やってはいけないことなんだ……。」

キリエ「え……？」

グランツ「変わりたいという願い……。」

それを唯一邪魔するものが《変わらないこと》を悲しむことなんだ……。

《変わらないこと》は、決して人を救えないことじゃない……♪

キリエや、アミタやエレノアが…、変わらず元気でいてくれて、いつまでも笑顔でいられること……♪

僕にとってそれは…、何よりの救いであり願いなんだ……♪」

キリエ「パ、パパ……。」

グランツ「ふ……♪」

優しく…、ほんとに優しく……、パパは私の頭を撫でてくれた……。

グランツ「昔から変わらない……♪

僕に似たくせつ毛……♪

無邪気で、甘えん坊なところ……♪

ちよっぴり泣き虫なところ……♪

そんなキリエの全部が、僕にとってどれだけの勇気と力になったことか……♪

傍にいてくれるだけで、どれだけ愛おしいと思ったことか……♪」

キリエ「ん……！」

パパに沢山沢山貰った大切なモノ……。

自分が欲しかった言葉が、私の胸に柔らかく入り込んで…、体を温めてくれる……。

嬉しくて涙は止まらないまま…、ほろほろほろと、落ちる雫が、床を濡らしていく……。

グランツ「どんなに難しい論文を書き上げた時より、どんなに研究の成果を出せた時より…、僕に力を与えてくれたのは、キリエ達がいつまでも、変わらず僕の傍にいてくれたことだったんだよ……♪

僕の支えは、いつも君達だった……♪

変わらず笑顔でいてくれることが、僕は何より嬉しかった……♪」

キリエ「う……、く……！ん、ん……！」

声も抑えられないほど、嬉しい気持ちが溢れて…、息が出来ないほど苦しいのに、心が満たされて……。

グランツ「《変わらないこと》を悲しむことと、《変わらないこと》を悲しむことは、全く別なんだ……。

《変わらないこと》を悲しむことは、変わらない自分を自覚していると

いうこと……。

自分を大切にしていなければ、気付くことさえ出来ないことなんだ
……♪

だから、自分を大切に思っているキラエを、僕はほんとに誇らしい
と思う……♪」

キラエ「そ、んな……、私……、私は……、……！」

私は……、ただがむしやらに自分の言葉を全部吐き出しただけで
……。

自分が抱えていた全部を、こぼしてしまっただけで……。

絶対に不安にさせてる……。

絶対に失望してる……。

こんな私に……、そんな温かい言葉なんて……！

グランツ「キラエ……♪」

キラエ「あ……、……。」

グランツ「ん♪大丈夫……♪

言ってくれて良いんだ……♪

悲しいことも、嬉しいことも……♪

僕達は……、家族なんだから……♪」

エレノア「ん……♪」

キラエ「あ……、……。」

う……、う、く……！うう……！！

う、ああああああ……！！！！

ああああああ……！！！！」

溢れる……、全部……！！。

悲しい想い、辛かった今までのこと……。

胸に残っていた痛みもトゲも全部……、溶かされていく……。

温かい……、ただ温かい言葉と笑顔が、私の心を救ってくれる……。

私が、今の私でいて良いって……。

そんな私でも受け入れてくれることが嬉しくて……。

今まで私は……、こんな簡単なことに気付いていなかった……。

ただ傍にいること……、守りたい誰かが、いつまでも元気で笑ってく

れていることが、希望になっっているんだってこと……。私にとつてのパパやママ…、お姉ちゃんと同じ……。ずっと、感じてきたのにいつのまにか忘れてしまっていた大切なモノ……。

それをまた、私は貰ったんだ……。

温かい言葉と、温かい笑顔に乗せて……。

キリエ「ひ……、う……！くっ……。」

椅子からベッドにもたれかかり、ただ溢れる気持ちと涙をシーツにこぼして……。

そんな時にも、ずっとパパは私の頭を撫でてくれていた……。

エレノア「キリエ……。」

私の横に屈んで、背中をさすってくれるママ。

優しい撫で心地に、気分も落ち着いて、段々と涙も晴れていく……。

キリエ「ありがとう…、パパ…、ママ……。」

エレノア「んっ」

グランツ「うん……。」

スーツと、心が軽くなつて、自然と笑みがこぼれる。

それにパパもママも応えてくれて……。

嬉しい……♪すぐく嬉しい……♪

グランツ「僕達と同じように、アミタもきつと…、キリエのことを

受け止めてくれる……♪

自分の思う通りの気持ちを伝えてごらん……♪

きつと……、上手くいくから……♪」

キリエ「ん……♪うん……♪」

《きつと……》

特にその言葉に力を込めて、パパは私に向けてくれた……♪

そう……、きつともう私は、《変わらないこと》を悲しまない……。

けど、《変わりたい》っていう願いは、ずっと大切にしていきたい

……♪

この願いも、みんながいてくれたから抱けた、私の大切な一部だから……♪

お姉ちゃん……、
今なら、きつと……、♪

……

アミタ「え……？」

低く…、鋭い声が耳に届きました。

声の主は、ちょうど私の正面…。

バスケットや紙皿を隔てた向かい側…。

王様の…、ディアーチエの鋭い目が私の方を向いて…、
気付いた瞬間、緊張感が走りました…。

ディアーチエ「もうよい…、と言ったのだ…。

ユーリ「ディアーチエ？」

シュテル・レヴィ「??？」

私も含め、その場にいる全員が驚いた顔をしていました。
言葉を発した本人のディアーチエを除いて…。

ディアーチエ「隠さずともよい…。我は勿論、ユーリ達も大体の
察しはついておるだろう…？」

アミタ「えっ……、？」

ユーリ「あ……、ん……。」

私に向けられていた鋭い視線が、少し柔らかい視線(もの)に変わっ
て、ユーリやシュテル、レヴィの方に移っていききました。

シュテル「……。」

レヴィ「ん？王様あく、それってさあ？

アミタとキリエの事??？」

アマタ「え……、……。」

デИАーチエ「ん……。」

「すぐくあつさり……、ピタリと正確に……。」

一番澄ました顔をしていたレヴィが、私はずっと抱えていた【重し】について口にしました……。

デИАーチエ「意外、であつたか……？」

アマタ「あ……、……。」

レヴィの言葉に動揺することを、当然知っていたかの如く、デИАーチエが言葉を投げてきます。

デИАーチエのその視線は、レヴィ達に向けられていた柔らかい視線のままでしたが、私にはそれ以上に先程レヴィに告げられた事実^{コトバ}を整理出来ずに混乱していました。

デИАーチエ「ここ数日、貴様らの様子を見ておれば嫌でも察するというものよ……。我だけが察した訳ではない、と理解もしたであろう？」

アマタ「は……、い……。」

その……、……。すみません……。」

デИАーチエ「今聞きたいのはそんな言葉ではないわ。バカ者め……。」

ユーリ「デИАーチエ……！」

デИАーチエ「ふん……。」

厳しい言葉……。

でも、全く正しい言葉でした……。

私が話すべきなのはこんな言葉なんかじゃありません……。

そんなデИАーチエのまっ直ぐすぎる言葉が続くのを、ユーリが優しく止めてくれました。

ユーリ「ごめんなさい、アミタ。

私達も触れていいか、とても迷っていたんです…。

安易に踏み込んではいけないと思って…。

わざと黙っていた訳では…。」

アミタ「あ……！違います…！

私が悪いんです……！

私が…、隠していたから……。」

ずっと隠してきたと…、

隠しきれていたと思っていたことを…、

その変化を……、

皆、本当は気付いていて……。

それで不安にさせていたことを、

重く受け止められずにはいらませんでした…。

シユテル「アミタ…。私達で良ければ聞かせて頂けませんか……？

ディアーチェも…、そして私達も…、それを望んでいます……。」

レヴィ「うん!!ボク達、話聞くよ♪」

アミタ「あ……、…。」

ディアーチェ「お互い、いつまでも煮えきらぬ様子であったからな
……。

我らにも関係のある話ゆえ、見て見ぬフリとはいかぬであろう
……。」

ユーリ「ん♪」

アミタ「ん……。」

シユテル、レヴィの紡いでくれる言葉とは違って、ディアーチェは
手厳しい棘のある言葉でしたが、何だか心配してくれているような言
葉に感じて、少し安心を感じました。

ユーリも隣で優しく微笑んでくれて、私の心がほどけるのを促して

くれました。

ゆつくりと…、私は声を出していきます…。

アマタ「……………私、どうしたら良いか分からないんです……………」
ディアーチエ「ん……………」

アマタ「あの子に…、キリエに何をしてあげたら良いのか……………」
キリエは、今とても悩んでいて…。

恐らく今まで自分がしてきたことを…。

あの子は考えすぎてしまう子ですから、まだ心のどこかで自分を許せないでいるんだと思います…。

私は…、そんなキリエを救いたいです…。」

シユテル「ん……………」

アマタ「でも…、それを上手く…、伝えられなくて……………」

胸がきゆうつと痛くなります……………。

伝えている言葉全てが自分を戒める言葉として助けを求めるように口から溢れて……………。

レヴィ「むう……………？アマタはさあ？

なんでキリエに言えなくて困ってるの??？」

アマタ「それは……………、すみません……………」

私にも……………、分からないんです……………」

レヴィ「んん??」

アマタ「今まで真つ直ぐにぶつけられていた気持ちが…、今では心のどこかに引つ掛かっていて……………」

伝えたいことは、手遅れになる前に伝えるべきだと…、あの時学んだはずなのに……………」

これではまた……………。」

また…、離れていってしまう……………」

そう、感じました……………」

1度経験したからこそ、今胸の中にひしめいている感情が、あのと
きと同じものであると分かった瞬間、不安で押し潰されそうになっ
てしまっているんです……。

ディアーチエ「何故か分からぬ…、か。

そこについては、貴様が導き出さねばならぬことであるからな
……。我等から告げることは出来ぬ。」

アマタ「は…、い……。」

そうです……。

これは私の問題……。私達の問題です……。

今でもこれだけみんなを不安にさせてしまっています……。
解決させるなら……。やっぱり……。

アマタ「やっぱり…、私達だけで……、。。」

ディアーチエ「貴様は重要な部分で勘違いをしているようだな
……。。」

アマタ「え……?。」

言いかけた言葉が塞^せき止められ、王様の思いがけないひとことに驚
きを隠せませんでした。

アマタ「勘…、違い……?。」

ディアーチエ「うむ……。貴様が悩んでいるのは、キリエへの言葉
……。

それそのものだろう……?

先に考えるべきはそこではない……。

アマタ……。貴様は、キリエに対してどんな気持ちで接しておるの
だ……?。」

アマタ「え……?。」

ディアーチエ「どんな言葉をかけるか、よりも大切なことであろう

……？かけるべき者の心を汲まずしては何も為せん……。貴様が持つている感情は、ただ傷心している者を救いたいというものか……？それともそんな確執に捕らわれているあやつを哀れむ気持ちか……？」
アミタ「私、は……。」

私が、キリエをどう思っている……。か？
確かに、忘れていたのかもしれない……。

伝えたい言葉も、伝えるという大切さも、伝えるべき相手がいてこそそのもの……。

そんなことも考えずに、私は……。

ディアーチエ「が、これも勘違いのひとつよ……。」
アミタ「え……？」

繋がった言葉に、また動揺した私がいきました……。
思い悩む暇なく、ディアーチエが続けた意味を考えます。
でも、考えに至る前に、またディアーチエは言葉を紡ぎだして……。

ディアーチエ「自分がどういった気持ちで相手に伝えるか理解するのは当然である……。

今、貴様がやらねばならぬことは他でもない……。
どういった気持ちで接するかではなく、どういった気持ちをぶつけないか……。だ。

先程貴様は言ったな……？
その気持ちがぶつけられずにいると……。
ならば何故伝えられないか、まずそれを考えるべきであろう……？

アミタ「私が気持ちを伝えられずにいる理由は……。、。、。」

考えたことは、ありました……。
一度考えて……。でもそんなのは身勝手過ぎると捨て置いた^{りゆう}真実……。

本当に自分勝手に、それこそキリエに伝わってほしくなかった一番の感情……。だからこそそれが一番根本にあるモノだったんです……。

これを……。言うべきなのか、わかりません……。

でも、言わなければ前に進むことなんて……。

アミタ「……………」。

理由が……。単に私のワガママだからです……………」。

あの時から……。言えずに仕舞っていた感情……。

キリエにだからこそ、言いたかった……。

キリエにだからこそ、言えなくなってしまった……。

それは……………」。

アミタ「ん……………」。

私は……。姉、として……。妹を助けてあげられないのが……。辛かったんだと思い、ます……………」。

キリエの……。妹の力になれないことが……。

ユーリ「アミタ……。」

アミタ「いつからか、妹は姉から離れて行って……。」

姉に頼らずに自分一人で何でもやる子になりました……。

それが寂しくもあり、でも嬉しく思っていたことに偽りはありませんでした……………」。

妹が成長するなら……。姉は、見守ることにしよう……。と。」

でも……………」、それでも……………」。

アミタ「本当は……。お姉ちゃんとして、ずっと、ずっと……。キリエの手を引いてあげたかったです……。あの子をいつでも支えられるようにずっと傍に……。私にとって、キリエが世界で一番大切なように、キリエにも私を世界で一番のお姉ちゃんとして認めて欲しかったんです……………」！」

そう、これは今まで隠してきた私のたったひとつのワガママ……。
声に出して改めて実感する自分の醜さ……。
キリエが望んでいないと分かっているのに……、
いつまでも捨てきれずに心に閉じ込めておいたモノ……。
いつかは……、と心にずっと留めておいた感情・言葉・真実……。

アマタ「キリエが生まれた時から、幸せそうに眠るあの子の顔を見
たときから、私はこの子を守ろうって……！何があっても守りたいって
……！
ずっと……、ずっと……、……。」

目頭が熱くなつて、視界がぼんやりと霞んでいきます。
キリエの顔が……、大切な妹の顔が、霞んだ視界とは別に、閉じた瞳
の奥にハッキリと映りました……。
無邪気に笑つて、私を呼ぶ声も、ハッキリと……。

ダイアーチエ「姉として……、妹を守りたい……。
それもずっと……、か。
確かに、それは相当なワガママであるな……。
例え姉妹と言えど、いつまでも子供のままでいるわけにもいかん
……。

離れていくというのは必然よ。
貴様が言つたようにな。」
アマタ「ん……。はい……。」

やっぱり、私は……、……。

ダイアーチエ「ふ……、……、
それで、よいではないか♪
アマタ「え……、……、？」

ディアーチエは一瞬優しく微笑んで、顔を上げた私の顔を…、瞳を見つめ、ゆつくりと話し始めました。

ディアーチエ「それがうぬの心よりの言葉であろう？

大切な者ならば守りたい……。

苦しんでいる姿を瞳に映すことなどしたくない……。

それがワガママであつてもなお突き通したい……。

それは何も悪いことではないのではないか……？

守るために…、繰り返しぬように…、それが例え己のワガママであつても貫き通す……！

血の繋がりのない我等でさえ、そのワガママとやらを貫いたおかげで今の我等がある……。

姉妹であるうぬらが、そうならん道理は微塵もない……。

そうであろう……？

アミタ「ん……、？」

ディアーチエ「姉として……、？」

そう思うならば、うぬは何も怖じずただ妹キリエに自分を伝え、信じればよい……。

きっと……、あやつもあやつなりの答えを出してくれるであろうから……。」

アミタ「で、でも……、？」

それでも……、もし駄目だったら……、？

ディアーチエ「我らを信じよ。」

アミタ「え……、？」

カチツと何かを外れて落ちたような音が胸の奥で響きました……。その感觸の謎に触れる暇なく、ディアーチエは言葉を掛け続けて……、……。

ディアーチエ「繋がりとは…、想いとは…、決して折れはせぬし、いつか繋がり伝わるものだ……。

あの時、我らは再び出会い、通じ合えた……。

その我らを信じよ…！何も恐れるな……！」

アマタ「あ……、……。」

《カチツ……！カチツ……！！》

ディアーチエ「我らがおる……。

例え自分を信じられずとも、我らが支える……。

我らが生まれたこの星を…、我ら自身を救い受け入れてくれたうぬらを……、今度は我らが支える番なのだからな……。」

ディアーチエに強く、優しく告げられた言葉^{想い}を受け、カチツ！カチツ！と鳴る音の正体にやっと気付きました……。

これは私の……、ずっと心に閉じ込めていた過去の確執や、抱えていた不安が解き放たれていく音……。

その音と共に心臓は脈打ち、体は熱くなって、けれど肩の力は不思議なほどゆつくりと抜けていって……、……。

抜けていく力に反して、心に暖かさが、元気が込み上げてきて、自然と笑みが零れました……。」

アマタ「ん……。」

ディアーチエ「んん……!？」

わ、我なら……！少なくともそうすると……、うぬに伝えているだけに過ぎんがな……、……、……！」

ユーリ「ふふ。」

シュテル「ん……。」

レヴィ「にひひ。」

微笑む私に気づき、ディアーチエはそれに気付いたようにスツと顔をそらして、頬を赤らめながら言葉を付け足しました…♪
私と同じく、ユーリもシユテルもレヴィも微笑んで…、。

ユーリ「ディアーチエの言う通り、きっとキリエも、アマタの言葉を受け入れてくれます♪」

大切な家族として、まっすぐにありのままの言葉を伝えてあげれば…、きっと…♪」

まっすぐに…、ありのまま…、。

シユテル「私も…、そう、思います…。

必ず助けたいという意志は、必ず…、未来に繋がっていきますから…♪あとは勇気を持って…、伝えるだけ、ですね…♪」

勇気を持って…、伝える…、。

レヴィ「アマタならだいじょぶ♪

僕達が言うなら間違いない！どーん！とぶつけて、どーん！と返してもらったら良いと思う！うん♪」

私なら…、大丈夫…、♪

アマタ「ん♪ありがとう…、ございます…♪

ディアーチエ、ユーリ、シユテル、レヴィ…♪」

感謝の言葉より先に、ポロポロと零れ落ちる涙…。

それを頬に感じながら、そんな私に微笑みを返してくれるみんな…。

とても温かくて、それがじんわりと心に伝わって…、。

離れた時間があつたからこそ…、すれ違ったからこそ紡げた絆と出

会い……。

私が怖がつていた離別^{コト}は……、

こんなにも温かい奇跡と魔法に繋がっていたんだと、
改めて教えて頂きました……。

いつのまにか私は立ち上がっていて……、

零れていた涙も吹き渡る風に乗って遠くへ行ってしまった
た……。

でも、大切なモノは心^{ココロ}にちゃんとあります……♪

だから……、……。

アミタ「伝えてきます……、キリエに……♪

私の全部を……、もう何も隠さずに……♪

ずっと仕舞っていた私の想いも、これからのことも……、全部……♪」

大切な、新しい家族に背中を押してもらえて……、

もう……、何も迷うことがなくらい心は澄んで……、

私は、緑の丘の上にある研究所に目を止め、爛々と瞳を輝かせて
ました……、……。

父さんや母さんがいる……。

そして、私の大切な妹、キリエがいる……、……。

自分を抑え、気持ちを伝えないままの私を悔やむことはもうしま
せん……。

気持ちをまつすぐ……、ありのままに伝える……。

そんな当たり前を、やっと胸を張って届けられる……。

離れていつてしまう怖さは、家族の温かさに溶け合って……、それ
すらも大切な思い出として分かち合えて……。

みんなに教わった大事なことを……、

大切に胸にしまって……、私は会いに行きます……♪

家族として……、お姉ちゃんとして……、

どんなワガママだって、どんなに夢のようだって、

大切な気持ちを、ありのまま届ける為に……、
キリエの、妹の笑顔を……また見る為に……、♪